池田朋子氏の討論に対する回答

THE AUTHOR'S ANSWER TO THE DISCUSSION BY TOMOKO IKEDA

(Tomoko IKEDA, J. Archit. Plann. Environ. Eng., AIJ, No. 513, 307-308, Nov., 1998)

竹宮 健司*, 長澤 泰**, 山下 哲郎***

Kenji TAKEMIYA, Yasushi NAGASAWA and Tetsuro YAMASHITA

The answers to Ikeda's questions are as follows.

- 1) The purpose of methodology in my paper is to put to the test the methods which include Ikeda's method to understand the features of interaction between patient and his family under palliative care and physical environment in Palliative Care Unit. As a result, the possibilities and limits of the methods are confirmed.
- 2) Some inappropriate expressions on references in the previous paper are corrected.

Key words : methodology, analysis on texts, literary writings, PCU

方法論、テキスト分析、闘病記、緩和ケア病棟

1. はじめに

この度は、拙稿「闘病記にみる入院患者の生活様態に関する考察～ホスピス・緩和ケア病棟の療養環境のあり方に関する研究その1」に貴重なご指摘、ご意見をいただきましてありがとうございます。池田氏のご指摘は、1. 手法論の進展のために、1) 池田氏の論文¹⁾を既往研究として位置づけるべきではないか、2) 独自の表現を用いるべきではないか、3) 上記2点を踏まえ、拙稿の手法論としての目的と結論を明確に述べてほしい、2. 参考文献の示し方についての考えを示してほしい、というご意見と承りました。そこで以下にそれぞれに対する見解を述べさせていただきます。また、こうした討論が、実際に分析手法の発展に寄与し得ることを願い、建設的に見解を示すと同時に、頂いたご意見を糧にして拙稿を補強する機会とさせていただきます。

1. テキストを用いた空間分析手法発展のために

1) 既往研究としての位置づけについて

貴稿は、景観認識のパターンや構造を明らかにすることを目的とし、手法として文学作品中の空間描写に着目しているのに対して、拙稿では、ホスピス・緩和ケア病棟を選択してくる患者とその家族の施設での生活様態を把握することを目的として、闘病記の環境描写に着

目しています。すなわち、テキストの資料的位置づけが異なっているために、拙稿中では、貴稿を既往研究のレビューの中では取り上げず、分析手法を説明する中でのみ取り上げています。しかしながら、ご指摘の通り手法論的な立場からみると、心象空間の分析と施設環境(現実の建築空間及び周辺環境)における生活様態の分析という目的の差異はあるものの、貴稿をテキストの分析手法に関する先行研究として位置づけるべきであったと考えます。また、紙面の都合上、拙稿の既往研究のレビューでは、医療施設環境に関連した作品に関する研究と、具体的な建築空間との対比という視点でのみ既往研究を取り上げています。その結果として、既往研究のレビューに関する記述が不十分なものとなっております。

2) 表現の独自性について

先に示しましたように、拙稿の手法的意義は、主としてこれまでの実態調査に基づく実証データによる考察の限界を超えるために、テキスト分析を併せて用いたことにあります。その点をより強調した論旨の展開と表現にすべきであったと考えます。しかし、ご指摘のように、貴稿におけるケーススタディの緻密なプロセスを参考にしつつ、表現方法に関する推敲が不十分であったことから、その表現において適切さを欠いた箇所がありました。具体的にご指摘のある箇所については、以下のような独自の表現をすべきであったと考えます。

* 東京都立大学大学院工学研究科 助手・博士(工学)
** 東京大学工学部建築学科 教授・工博
*** 名古屋大学工学部社会工学科 助教授・工博

Research Assoc., Dept. of Architecture, Tokyo Metropolitan Univ., Dr. Eng.
Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Tokyo Univ., Dr. Eng.
Assoc. Prof., Dept. of Social Engineering, Faculty of Engineering, Univ. of Nagoya, Dr. Eng.

[1-1] p.94 左 L9-16 (ケーススタディのプロセスと目的を簡潔に説明する箇所)

しかし、闘病記中の環境描写から人間と環境の相互浸透的な関係を捉える方法論は確立していない。そこで、本稿では、A病院緩和ケア病棟での生活を表した一作品をケーススタディとして取り上げ、実際の施設環境との対比をもとに闘病記中の環境描写を分析する方法を検討する。その際に闘病記の性質を考慮し、また、既往研究の手法の有用性を検証しつつ、闘病記中の環境描写を読みとる手法の有用性及び限界について考察する。

[2-1] p.94 左 L30-32 (既往研究の手法を簡潔に説明する箇所)

若山の手法は、作品中に表記されている建築用語をすべて抽出し、それらの用語の使用頻度や使用される文脈を調べるといものである。

[4-1] p.96 右 L4-7 (課題と展望を簡潔に述べる箇所)

今回明らかにできたのは、A病院緩和ケア病棟での生活を表した一作品に見られる相互浸透的な様態の一部である。同一の施設環境を対象にした他の作家による作品や他の施設環境を対象とした作品における様態と比較し、実際の施設環境との対比の中でのこのような手法の有用性及び信頼性について考察したい。

また、貴稿からの引用について不適切な記述がありましたが、本来ならば以下のような表現をすべきであったと考えます。

[3-1] p.95 左 L9-18 (池田氏の定義を引用したことを簡潔に説明する箇所)

池田は文学作品から都市景観を読み込む際に文章のまとまりを以下のように定義している「文章のまとまりのレベルは読みとりの視点により無数に設定できるが、ここでは文章の中心となる『文章のまとまり』のレベルを、都市空間の読み取りという視点から、『場面』という観点で設定し、場面に対応する文章群を、文章の一まとまり、と定義することにする。ここで『場面』とは『テキスト中で視点場および時間が連続して認識されている空間』と定義する」(注として、池田朋子、紺野昭：文学作品の空間描写から都市・地域景観を読みとる方法に関する研究 小説「城のある町にて」をケーススタディとして、日本建築学会論文報告集第450号、p.124 左 L9-15, 1993年8月)。ここでは、この定義をもとにテキストを場面に分割し施設環境との相互浸透的な様態を読みとる資料とする。

3) 拙稿の手法論としての目的と結論

貴稿は、都市・地域空間の景観認識のパターンや構造を明らかにすることを目的として都市小説における空間描写に着目しテキストの分析を行っています。そして、都市小説の中で描かれているある時点で認識される「景観のひとまとまり」を「場面」として定義し、このまとまりを単位として、「場面の連続性」や「場面のモデル図」などの分析手法を確立し成果を得られています。

拙稿の目的は実際の施設環境(現実の建築空間及び周辺環境)との対比を念頭におき、観察調査などの他の調査手法からは得ることが難しい人間と環境との関係を捉えることであります。その目的を達成するための手法として、既往の研究手法や闘病記の性質を踏まえて、闘病記から環境描写を読みとる分析を行っています。拙稿のケーススタディでとりあげたような患者の家族によって書かれた闘病記においては、患者を含めた施設環境を「ある時点で一定の視点から捉える」記

述が多く見られるため、今回は貴稿の定義によってテキストを「場面」に分割し、具体的な施設環境構成要素の意味や有用性をとらえる分析を行いました。しかし、他の闘病記とりわけ患者自身によって書かれたテキストを分析する際に、この定義が有効であるかについては、今後検証していく必要があると考えています。

また、拙稿では各日ごとの出来事や身体状況、設備・備品などの物的環境要素に関する記述、会話の内容を抽出し、実際の施設環境と対比させながら、施設環境への相互浸透的な様態を読みとることを分析の肝要な点としています。この手法は、患者の身体・心理状況、施設環境への働きかけや意味づけ等が経時的なデータとして分析できるため、闘病記から人間と環境との関係を読みとるための有用な手法のひとつではないかと考えています。

そして、このような試行の結果として、設計者の意図や仮説を含んだ施設環境(現実の建築空間及び周辺環境)における患者とその家族の生活様態をテキストから読みとることで、観察調査などの他の調査手法からは得ることが難しい人間(とりわけ感情)と環境との関係を捉えることができたと考えております。さらに、拙稿中では詳細には述べておりませんが、闘病記の舞台となった同一の施設を他の調査手法による実態調査を行っています。それらの調査によって得た実証的データと併せて分析することで、人間と環境との関係をより多面的にとらえることができるのではないかと考えています。これらの内容については、統報でご報告したいと思っています。

2. 参考文献について

澤田が述べているように、論文において注として示される参考文献には、1) 主張や解釈の根拠がどのような資料や権威に基づいているのかについて出典を照会する、2) 研究を参考にさせてもらったことへの感謝、3) 読者への情報提供、の3つ役割があるといわれています。²⁾ それらを明確に示すという意味からも、出典に関する完全な情報を本学会の論文執筆要項に従って記述することが必要であると考えます。

3. おわりに

池田氏による討論の主旨は、拙稿において池田氏の論文の位置づけに関する記述が不十分であったこと、文章表現に対する配慮が欠如していることと考えますが、より本質的には、学際的な視点からの既往研究のレビューと注の適切な整備の2点に要約できると思います。拙稿の全般にわたり推敲が不十分であり、また不適切な引用によってご迷惑をおかけしましたことを深くお詫びいたします。しかしながら、貴殿の討論がこの種の先駆的な分析手法を用いた研究を本学会の場でより明確に示す機会を提供されたことも事実であり、この点について改めてお礼申し上げます。末筆ながら貴殿のテキスト分析手法の開発のさらなる展開を期待いたします。

参考文献

- 1) 池田朋子、紺野昭：文学作品の空間描写から都市・地域景観を読みとる方法に関する研究 小説「城のある町にて」をケーススタディとして、日本建築学会論文報告集第450号、pp.121-130, 1993年8月
- 2) 澤田昭夫：論文のレトリック、講談社学術文庫、pp.247-249, 1983年

(1998年6月19日原稿受理, 1998年6月22日採用決定)